歴史的景観に思う

内田修道

九月三十日、久しぶりのと言うべきか、つかの間のと言うべき好天に恵まれた秋の歴史散歩の下見となった。午前十一時ＪＲ川崎駅の改札口に川崎の〝ぬし〟Ａ氏の姿が見えた。まもなく事務局の下見メンバーが揃った。久しぶりの川崎訪問である。駅ビルが全く姿を変えていた。かつての泥臭い、ごたごたした雰囲気は全く消えうせていた。今やハイテクの最先端都市を目指しているそうだ。そういえばフィールド・ワークの出発点となる川崎教育文化会館も産業文化会館の名を変えていた。当日と同じ時刻に合わせて会館の裏手にある妙遠寺の泉田二君碑を見て、それからバスに乗り、川崎大師へ向かった。川崎大師には多種類の碑がある。名もない、引取り手のなかった女郎の碑もある。Ａ氏が〝まるで文化の墓場だよ〟といった。川崎には史跡と言っても皆碑だけで、当時を偲ばせるものは皆無に近いとＡ氏は言う。歴史的景観ゼロの地。ふとＡ氏と雑談しながら、私は春の鎌倉歴史散歩を思い出した。

春の歴史散歩の準備で石井進の『日本の歴史7・鎌倉幕府』（中央公論社一九七四年）に目を通していると、自分が子供のころ遊びのフィールドにしていた化粧坂の記述に出会った。「京都から鎌倉に下ってきた一女性は、化粧坂の上から鎌倉の町をながめて、『東山で都をみるときとは大ちがい、まるで階段のように家々が重なりあって、袋のなかに物をつめこんだようだ』と記している」云々と。現場に足を運んだ人なら誰でも鎌倉市内を化粧坂から眺めることは不可能であることを納得するであろう。石井は『鎌倉武士の実像』（平凡社一九八七年）で化粧坂を取り上げ「建長三年（一二五一）、幕府が鎌倉の中で特に大町・小町など七ケ所の場所をえらんで公認の商業地域として指定した。その一つは実にこの『化粧坂上』であった。現在も中世以来の雰囲気を残す化粧坂を鎌倉の内側から上がり切ると、そこは葛原岡の岡の上で、今は公園化されてしまい、かつての景観を想像することは困難である。しかし武蔵大路とよばれる中世の主要な鎌倉街道ぞいの境の地であるし、地形的にも平坦で、この坂の上一帯が商業地域としてにぎわったことは十分納得がゆく」と述べている。文章は、①文献史料から「化粧坂上」を疑うべくもない事実として取り上げられていること、②鎌倉側から坂は「中世的雰囲気」＝歴史的景観が残されていること、③坂上の葛原岡は景観が破壊されているが、地形的には平坦で商業地域であったことを確信していること、を特徴としている。論理の展開は、①の確信と、②の歴史的景観の残存と、③の地形上の理由から結論を導きだしている。商業地として成り立つ条件の第一に考えることは水であろう。尾根上で水を得ることは不可能である。鎌倉時代に揚水器でもあれば別だが。こう考えると一体「化粧坂上」とはどこを指すかが問題である。果して文献上の文字は地形上の事実を即表現しているのであろうか。②の景観にしても果して鎌倉時代以来たいして変容されなかったものなのか。

葛原岡は明治に村社創設がなされ、最初の変容をうけている。そして、私の父（明治三五生）の話によれば、昭和の初めに村社から郷社への格上げ運動が熱心に推し進められ、佐介谷側から現在の葛原岡への道がつくられ、扇ケ谷側からも拡幅が行われたという。景観はかわってしまっているのである。かつての道は一端佐介側に下っていた。石井は文献上の文字を即事実を表現するものとして扱い、さらに景観の歴史的変容を全く視野外に置いている。

鎌倉を見る目で川崎を見ると、歴史的景観を復元するなど思いもよらない。Ａ氏は「墓場」と言ったが、しかし、川崎大師の境内に入ったとき何とも言えないホッとした雰囲気に身体中の緊張がゆるむ思いがした。鎌倉では決して味わえない、これはなんであろうか。いまでも善男善女がひっきりなしに詣でる。この心の歴史は景観の中に入らないのだろうか。そんなことを考えながら川崎大師をあとにした。

（京浜歴史科学研究会代表　十月二十二日記）